知っておきたい

世界各国の産業用ヘンプ

第10回

中国②
ヘンプを推進する条例を作った黒龍江省

赤星 栄志 あかほし よしゆき

1974年滋賀県生まれ。日本大学農獣医学部卒。同大学院にて産業用ヘンプに関する研究により博士号(環境科学)を取得。99年よりヘンプの可能性と多様性に注目し、日本の大麻草に関する伝統文化復興と麻の研究開発に携わる。現在、日本大学生物資源科学部研究員などに在職。主な著書・編著に『ヘンプ読本』『大麻草解体新書』『大麻という農作物』がある。

中国のヘンプ産業の中心は、前回紹介した最西南部の雲南省だが、最近は黒龍江省が頭角を現している。黒龍江省はロシアと国境を接する中国の最北東部に位置し、かつて満州国があった地域だ。省内に広がる大平原ではおもにトウモロコシやマメ類などが栽培され、中国の食糧基地と呼ばれている。2017年の作付面積は2万8000haと中国一の生産地である。8月に（一社）北海道ヘンプ協会が企画した視察ツアーで現地を訪ねた。同協会の了解を得て、その最新動向を伝える（写真はいずれも同協会の提供）。

省政府直轄の研究拠点

ヘンプの研究拠点は、黒龍江省科学院の大慶分院に置かれている。74年に設立された亜麻産業研究所が前身で、09年に省政府直轄の自然科学研究組織の支部として改組された。大慶分院だけで研究員は72名、試験栽培地は300haを有する。案内された展示室には、種子や繊維の原料から衣食住のさまざまなヘンプ製品が並んでいた（写真1）。栽培が盛んなカナダのアルバータ州と、育種で100年以上の歴史を持つウクライナと数年前から共同研究をしており、研究棟には「中国カナダヘンプ植物共同研究センター」の看板が掲げられていた。

ここで育成された品種は、「火麻1号」をはじめ9つある。いずれも雌雄異株で、マリファナ成分のTHC濃度が低く、繊維品質が良いという特性を持つ。欧州では、種子と繊維を同時に収穫できる雌雄同株の育種が盛んだが、中国では紡績原料の需要が高いため、繊維品質は雌雄異株のほうが優れる雌雄異株の育種研究が行なわれている。

写真1：黒龍江省科学院大慶分院の展示室



禁止毒物条例からの除外

黒龍江省での産業用ヘンプの取り組みを加速させたのは、省政府がTHC含量0・3%未満の産業用ヘンプを禁止毒物から除外したことによる。17年5月に、黒龍江省の禁止毒物条例の第四章に工業用大麻管理の条項を設けたのだ。届け出により、省が指定する産業用ヘンプの品種であれば栽培できるようになった。

省科学院の趙副院長によると、この条例改正に至るまでに3年間を費やしたという。中国でも一般的な認識は、大麻草＝毒草である。政策決定者にその意識を変えてもらい、法律をも変えるのは極めて困難なことだった。事態を打開すべく、海外の国際会議に出席して情報を集め、わかりやすい言葉で何回も説明したうえで、省内でヘンプの国際会議を開いた。政策決定者全員が出席して話を聞き、併設した展示即売場で販売したヘンプ商品を購入して実際に使ってみたそうだ。また、中国には制定から20年経った時代に合わない法

律を再検討する制度があり、産業用ヘンプについて取り上げてもらうよう進言もした。省条例の改正は、研究者らの並々ならぬ努力と働きかけが実った形だ。

195億円を投じる産業プロジェクトが進行中

産業界からは、新たに取り組みを始めた企業を紹介する。天木工業大麻科技開発有限公司は17年5月に資本金2000万元（約3億円）で設立したばかりの企業で、大慶市内に4000haのヘンプ栽培地と一次加工工場を所有する。もともと食用キノコ（キクラゲなど）と肥料を製造する会社を営んでいた田社長は、オガラ（麻幹）のチップがキノコの菌床に適することを知り、ヘンプにさらなる可能性を感じたことから新会社を設立したという。ヘンプの栽培、加工、炭製造、食用キノコの栽培、紡績、貿易の6つの事業会社から構成される。

同社の畑では大慶分院が育種した「火麻2号」が栽培されていた（写真2）。ヘンプの茎から繊維とオガラを分離する一次加工場には機械が6ラインあり、その処理能力は1日（24時間）で240tに及ぶ。湿気が多い7～9月は工場を休み、10月から6月までの9カ月間稼働する。なお、中国では紡績用に長い繊維を取るので、欧州の機械とは構造が異なる（写真3）。

同社の事業計画は、現在、繊維・茎・種子加工を手掛ける第一期の段階で、これからさらなる設備投資を行ない、第二期の花・葉・根の加工、第三期の不織布や生地製造まで計画されている。総投資額は13億元（約195億円）が見込まれ、完成時の売上高は年間321億円、地方税額45億円、栽培面積6万6000ha、雇用2000人を目指している。

北海道とヘンプに関する科学技術協力協定を締結

黒龍江省と北海道は86年に友好提携を締結し、さまざまな分野で官民が交流してきた。このたび、前述の大慶分院と北海道ヘンプ協会がヘンプに関する科学技術協力協定を締結した（写真4）。すでに、カナダやウクライナと共同研究の実績があり、日本との研究交流にも期待していた。大慶分院の孫院長は、「ヘンプの研究に国境はなく、研究成果はすべて公表し、人類の発展に役立てることがモットー」と話している。

写真2：天木工業大麻科技開発有限公司のヘンプ畑（品種：火麻2号）と刈り取り機



写真3：天木工業大麻科技開発有限公司の田社長が、自社の一次加工ラインを案内してくれた



写真4：協定を締結した大慶分院の孫院長と北海道ヘンプ協会の菊地代表理事

